

犬のがんが、みつかる

5

フィラリア予防シーズンにおける がんリスク検査の提案と実践

いぶきの動物病院
島田 大

はじめに

フィラリア予防シーズンは
飼い主が動物病院を訪れる絶好の機会

ちょうど本稿を書いているのが4～5月であり、いわゆるフィラリア予防シーズンの真っただ中で、一年のなかでも最も犬の「採血」をする件数の多い時期である。また日常元気に過ごしている動物たちが動物病院に来院する絶好の機会でもある。当院ではかねてからこの機会を、動物の病気の早期発見につなげる絶好の機会と捉え、様々な疾患、すなわち血液疾患、腎臓・肝臓など内臓疾患、内分泌疾患を対象にした健康診断を提案、推奨してきた。

年々獣医学が進歩し、各検査会社の研究や努力もあり、血液検査にて様々な内臓疾患の検診を行うことができるようになってきた。たとえば、早期の腎機能マーカー（SDMA）、シスタチンCなどが登場し、これにより早期に腎臓病などを発見できるようになった。また、循環器疾患に関しても、Nt-proBNPおよびNt-proANPなどの診断の補助となるマーカーが開発され、非被爆、低コストで1次スクリーニングを実施できるようになってきている。

健康診断というと、我々人は乳幼児健診にはじまり、法定検診、法定外検診（生活習慣病検診など）の法的根拠などに基づき定期的実施される制度や義務がある。

しかし、動物はあくまで家族の意志によって受診や健康診断を実施している状況である。

動物は、自ら不調を訴えることが困難なため、往々にして、発覚した際には、比較的進行した病態にあることも少なくないため、むしろ人以上に健康診断が重要と考える。

フィラリア予防シーズンは、フィラリア症の予防薬

の投与開始を正確に確認するため、フィラリア抗原検査、マイクロフィラリア検査などを実施する目的で「採血」を行う必要があり、日常、自覚症状のない犬も受診することで、「採血」や健康診断を実施する絶好の機会になっている。

予防シーズンにおいては、猫はフィラリア検査としての採血は必要としないが、犬同様にフィラリアや、ノミ、マダニ予防で多く受診するため、同様に採血など健康診断を提案するよい機会と捉え、啓発や提案をしている。

フィラリア予防シーズンに合わせて健康診断や
がんリスク検査を提案する意義

アニコム「家庭どうぶつ白書」などアニコム損害保険（株）のデータによると犬の死因トップは「腫瘍（がん）」でありとくに10歳以上での割合が高くなっている。また、6歳以降の腫瘍罹患率は犬で9.7%、猫で2.7%と中年以降で腫瘍の罹患率が上昇している^[1, 2]。

また、多くの「腫瘍（がん）」は、他の疾患同様、診断時の進行段階（ステージ）によって、治療方針や予後が大きく異なるため、早期発見が好ましい。

血液、腎臓、肝臓、循環器、内分泌疾患のみならず、「腫瘍（がん）」の早期発見の重要性はますます高まっていると考えられる。

腫瘍の詳細な診断には、身体診察、便検査、尿検査、血液検査とともにX線検査、超音波検査、CT検査、MRI検査、内視鏡検査、PET検査などの画像検査が必要になる場合も少なくない。しかし、これらは被爆や、動物の麻酔が必要である場合が多く、精神的・身体的負担になり、また、公的保険制度がないため高コストになりやすく家族にとっては、経済的な負担になりかねない。



図1 愛玩看護師による採血が現場に定着しつつある実例

当院では獣医師が診察室で別の症例の診察をしている間に、処置室で愛玩動物看護師が採血を実施している。



図2 LINEでの検査案内

また、昨今の人員不足が大きな課題の一つとなっている動物医療現場では、とくに繁忙期などでは、検査そのものが労力として負担になる可能性もある。

当院では、ツールの一つとして、線虫の嗅覚を用いた、がんリスク検査「N-NOSE[®]あにまる」を使用している。少量の尿で、非侵襲でがんのリスクが評価できる検査として注目し、当院では早期から臨床現場に導入してきた。「N-NOSE[®]あにまる」は尿で検査できるため採血の必要がなく、猫でも実施可能であるため、症例に応じて使用している。

がん検査の臨床現場での導入背景

近年、インターネットなどの情報が発達し、飼い主側も前述した、動物における「腫瘍(がん)」の罹患率や死亡原因としての高さなどは認識している。また、人医療では検診や治療のモニタリングでPSAやAFPをはじめとした腫瘍マーカーが用いられることが多くなり、診察室内でも「動物のがんも血液検査でわかりますか？」などのご質問をいただくことも増えてきていた。そして、以前からフィラリア検査で、せっかく(痛い思いをして)採血するのだからその血液で調べられる内容はできるだけ広く調べてあげたいという早期発見のニーズは存在していた。

今までは、残念ながら動物では人のような血液で実施できる「腫瘍(がん)」の検査は一般的には普及しておらず、実施が難しいと希望する家族にお答えせざる

を得ない心苦しい状況があった。

そのような背景のなか、がんマーカーとは性質や意義が若干異なるものの、新たな血液バイオマーカーによるがんリスク検査(Nu.Q[®] Vet Cancer Test)が登場したことで、今まで答えられなかったニーズに対して答えることができるようになり、当院では家族の希望にあわせて活用している。一回の採血でそのままがんリスク検査を実施できるため、提案もしやすく、希望を得られやすいと感じている。また、比較的安価で結果も早く得られる点がメリットであるとも感じている。

愛玩動物看護師の国家資格化とチーム医療の進化

他業界と同様に動物医療業界も業界全体の人材不足、採用難に悩まされている。筆者の周囲をみても人材不足は、健診や予防を担う、とくに地方の動物病院のほうがその傾向は顕著であると感じられる。

そのようななか、愛玩動物看護師法(令和2年5月施行)による愛玩動物看護師の国家資格化は、動物医療業界にとっても歴史的な転換点になり得ると考える。とくに「採血」は獣医師の指示のもとで実施できる「特定行為」として法的根拠が明確になり、診療補助の幅が拡大した。

以前は、獣医師のみが行っていた「採血」は愛玩動物看護師でも行うことができるようになったため、実際当院でも、フィラリア検査などの採血を愛玩動物看護師が積極的に実施している(図1)。このように役



図3 DMでの検査案内

割分担をすることで、病院全体の作業効率化につながり、獣医師が別の業務に集中できるようになっている。また、愛玩動物看護師側も国家資格を活かした業務を実施できることで、やり甲斐やモチベーションアップにもつながっていると感じている。

今後、動物や家族目線でも、採血および血液検査は今まで以上に受けやすい検査になっていくことを期待している。

そして、1次検査としてのがんリスク検査(Nu.Q[®] Vet Cancer Test等)を取り入れることで待ち時間対策(とくに繁忙期)にもなると考えている。

フィラリア検査シーズンにおけるがんリスク検査の実践例

フィラリア検査などで実施する採血を活用し、健康診断・がんリスク検査をオプションで提案

あらかじめ、家族向けダイレクトメールの送付や公式LINEの配信でフィラリア予防の啓発や、この機会に健康診断を提案するとともに、新たなオプションとしてのがんリスク検査を受けることができるようになったことを案内している。また、採血前の絶食時間なども併せてインフォームした(図2、3)。しかし、希望者の一部絶食が不十分な動物もあり、改めて事前

の案内や啓発の重要性を感じる部分もあった。

年齢、犬種、身体診察所見に応じて、健康診断コースや、オプション項目を作成・メニュー化し、様々な病気の早期発見の機会と捉えてスムーズに提案、準備をできるようにしている。当院は現在、予約優先で診察を行っており、予約の時点で大まかな受診の目的を把握できるようにしている。フィラリア予防や健康診断の希望で受診された場合は、受付の後に愛玩動物看護師がメニューを用いてヒアリングをし、健診のコースやオプションの希望の有無を確認している。

がんリスク検査は、やみくもに提案することはせず、シニア犬、がんの罹患率の好発犬種などを中心に提案している。過去の飼育犬、または同居犬にがんの治療歴のある家族にもがんの入口検査として提案している。また、体格や性格から画像検査のハードルが高い犬にも提案価値の高い検査であると考えている。

Nu.Q[®] Vet Cancer Testは、下記のような利点がある点を提案時に説明している。

- ①従来の検査と比較して少量の血液(2mL)のみの採取で検査が可能であること。
- ②症状が現れる前(浸潤前のがん)に発見できる可能性があること。
- ③従来のがん健診より費用が抑えられていること。

採血は、診察室または診察の前後に処置室で採血している。健康診断などの結果は、希望をうかがい、後日対面、郵送、電話のいずれかで報告しているが、がんリスク検査は、解釈やインフォームも重要であるとの認識で今のところ電話か対面で報告している。

結果は、①ローリスク、②グレーゾーン、③ハイリスクの3段階で報告される。

ローリスクの犬の家族には、がんのリスクが低いことを伝え、1年後を目処に今後も定期的な検査の受診をおすすめしている。

グレーゾーンの犬の家族には、しっかり絶食できていたかなど改めて確認し、できていなかった場合は、再度4時間以上の絶食での再検査、できていた場合は、4時間絶食のうえで2~4週間後の再検査をおすすめしている。再検査時も高値の場合には、念のため、全身のX線検査、腹部超音波検査を提案している。

ハイリスクの犬の家族には、追加の身体診察で、しこりやリンパ節の腫大などがいないかを確認し、全身のX線検査、腹部超音波検査、必要に応じてCT検査を

提案している。

がんリスク検査はあくまでもリスク検査であり、単独でがんの存在や局在を診断するものではなく、他の検査と同様、偽陰性、偽陽性がでる可能性もあり、結果の解釈や丁寧なインフォームが必要と考えている。また、その検査意義や診断意義の精度向上にはさらなるデータの集積や研究が必要であると考えている。なお、何らかの不調など具体的な症状がある場合や身体診察で異常が認められる場合には、検診のフローとは別で対応し、原因を調べる目的で血液検査自体も院内で実施し、必要や希望に応じてX線検査、超音波検査などを実施している。

今後への期待と課題

血液および尿を用いたがんリスク検査が登場し、より多くの犬猫の早期がん発見が期待できるようになった。また、愛玩動物看護師が国家資格となり、役割の拡大や業務効率化ができるようになった。今後獣医療のチーム医療もさらに進化していくと考える。業界として、それを動物のQOLや飼い主の満足度上昇につなげていく必要があると考える。

おわりに

フィラリア検査シーズンを活用した、がんリスク検査の提案は、家族・動物・動物医療現場に多くのメリットがあると考えられ、今後の普及が期待される。

日本の動物病院業界は世界に例をみないほど、多くの動物病院にX線装置、CT検査、超音波診断装置が普及しているといわれている。しかし、昨今は物価も高騰し、X線、CT診断設備、内視鏡検査機器、超音波診断装置の導入コストは増大している。現状、動物病院でのX線装置の普及率は80%程度といわれているが、将来は、画像検査機器を有さない予防や健康診断初期治療を目的としたクリニックと高度な専門病院の分業化はすすむと考えられる。

検査精度や偽陽性・偽陰性の課題など今後の研究・症例蓄積の必要性はあるが、血液でがんのリスクが評価できるようになれば、クリニックでがんリスクが高いと判断された動物が、紹介された、中規模以上の病院や専門病院で詳しい検査を受ける流れなども生まれてくると考えられる。また、開発途上国など、画像検査機器の普及の乏しい国や地域においても、活用が期待され、世界中でより多くの動物のがんの早期発見や治療に寄与できると考えられる。

参考文献

[1] 井上 舞、杉浦勝明(2022)：動物病院カルテデータをもとにした日本の犬と猫の寿命と死亡原因分析、日獣会誌 75巻6号、e128～e133。

[2] アニコム家庭どうぶつ白書2022、アニコム ホールディングス株式会社。

島田 大

Dai Shimada, D.V.M., Ph. D.

2003年に鹿児島大学を卒業。2006年 山口大学大学院連合獣医学研究科終了、獣医学博士取得。6年半の勤務医を経て、2009年大阪府和泉市にいぶきの動物病院を開業。得意な分野・関心のある分野は、がんの治療・予防。外科、整形外科、エキゾチックの診療、経営学。

